會報

1965年9月 | 243 | 日本山岳会

日本山岳協会の新しい考え方について

松方三郎

ぎりぎりに切り詰めて考えれば山登りというものは個人々々のもので、軍隊や近代工業のように、組織で動くものではない。組織の中の一環としての個人という場合も――たとえば遠征隊のような場合には――考えられないものでもないが、その場合でも、一人の人間として行動し、考え、感じることがなかったとすれば、山登りは世にも味気ないものになってしまうだろう。だから山の仲間が寄り合って会をつくるという場合にも、自然気心の合った仲間同志の間の集りという範囲を余りはみ出すことはできない。

わが日本山岳会も、そうした集団だと考えていいのであろう。たとえお互いに顔を知らないでも、話したことがなくても少なくとも会の目的に賛成し、会の伝統を知っている山の好きな仲間同志が集まっているものだといってよいだろう。

今から六〇年前の明治三八年に会ができたとき、日本山岳会は、山を愛する人々の集まりとして、多分、日本では最初の団体であり唯一のものであった。然し今日では日本国中、どこにいっても、山岳会のないところはない。「山日記」のリストで数え挙げてみれば、この事実は明白だが、それに漏れている団体も多いことだろうし、全然こうした会に関係なしに山に行っている個人は、おびただしいものであろう。

日本山岳協会の新たな構想は、何よりもまず、こうした日本の実状を踏まえて、その上に生れたものだ。かって日本山岳会が、単独に、体協加盟団体の立場にあった時代があったことはご承知の通りだが、五年前に、これを更めて、日本山岳協会という名の下に、全日本山岳連盟とともにこれに加盟する形をとったことも、根底にはこうした事情を頭に入れてのことであり、今またさらに新しい段階に脱皮しようとしているのも、同じ方向を一歩進めたものだといっていいと思う。

実際をいうと、こうした問題には、それぞれ沢山の行きがかりがついているもので、きれいさっぱり割切れない場合が多い。しかし大切なことは、今日の日本全体を見渡してみて、どんな形の全国的の組織が、いちばん日本の登山界の現状に即したものであるか、ということを、いつも考えの中心におくことだと思う。

中央に偉いお山の大将がいて、これが全国に号令するなどということは、山の世界では恐らくは通用しない。山登りの本質からみてそんな形のものができるわけもない。しかし時と場合によっては、実際問題として、全国的な機構があった方が、都合がよいということもある、そして、そんな場合は個々の団体を横につなぐ連絡機構をもって、これに代えることになるだろう。それも地方、地方にそれぞれに、そうした機構ができ、それが更に、全国的につながったならば、もっとも自然な全国的な機構になろうというわけだ。

個々の団体がそれぞれ成り立ちを異にし、何ほどかづつの個性をもつとするならば、地方、地方の間にも、多少の違いがあるのは当然のことだろうが、それでも、年に一度の国体行事とか、あるいは遭難防止とか自然保護とか、お互い力を協せることによって、お互いに益し、また多少とも世を益するということもあろう。全国機構が、こうした面での連絡の拠点となり、共通の利害のために奉仕する機能をもつこととなるならば、それは大いに存在の意味のあることだと思うのである。

事務機構であれば、必要な役員もおかねばならず、そのために役員を選び出す方式も考えねばならない。役員はいわば小使仕事をしなければならないわけだが、誰か

目次

日本山岳協会の新らしい考え方について……松方三郎……一
日本山岳協会の新たな組織作りについての考え方
日本山岳協会臨時役員総会……二
・鹿内辰五郎の思い出……武田久吉……三
岳人の奥津城（下）古沢　肇……四
君島久登君の死を悼む
君島君の事……広谷光一郎……五
遺骨を迎えて……鈴木郭之……五
顛末報告……倉知　敬……六
早大ローツェ・シャール写真……七
会員通信
アラスカ（芳野）……八
グリーンランド（宮原）……八
アンデス（高三公一）……九
自然保護（村井）……九
パリー通信（小野）……一〇
木暮翁碑前祭（山村）……一〇
飯豊（五十嵐）……一〇
飯豊写真（五十嵐）……一一
懇親会・歓迎会……一二
お知らせ……一三
JAC海外登山に対する推薦状発行規定……一三
会務報告……一三
新入会員、復活会員……一五

会費未納の方へ

本年度会費未納の方は至急お払込み下さい。

が替る替るその負担をすることにして、その代りにちゃんとした事務局を持つことになれば、事務は捗どるだろう。

日本山岳会は今日まで、全日本山岳連盟とともに、日本山岳協会を作って体協に加盟して来ている関係から、役員も会から出し、費用の一半も分担して来た。ことに今年度は、協会の動きにより積極的に参加する目的で、会の常務理事全員をそのまま役員に出し、連絡を一層密にして来たわけだが、会としての問題は、新機構の下で地方組織の中に、どんな形で参加していくかとか、会の学生部門の仕事をどんな方向で育て、それを協会の機構と結びつけるとか、問題はいろいろあると思うが、これらの問題は既に理事会で討議されており、近く結論が出されることになるだろう。

ほかの体育団体と異なり、山の団体は多種多様なだけに、地方の組織といえども、そう簡単にできるものとは考えない。競走や競技で優劣をきめることは、山の世界ではできないだけに、どんな形にでき上っても、全国的な機構は、大変幅の広いものになるであろうが、それもそれなりによいことではないだろうか。大切なことは、全国的機構が如何なる意味でも統制機関ではないこと、そうしたものは山の世界ではできないこと、やろうとすれば無理がでることを理解しておくことだろう。

その意味で、ひとことに体育団体といっても、山の場合でき上るものは、ほかの団体とはどうしても違ったものにならざるを得ない。しかしそれが日本の登山界全体からみて、何ほどかの役に立つ役割を果すならば、これは日本山岳会としても、大いに力を致して然るべきことだろう。

地方々々の組織ができ、それが単位となって中央の機構を選び出していくことだから、でき上ったものは、今日のそれとは大いに違ったものになるかも知れない。それもまた、今日の日本の登山界の姿を反映するものとして意味のあることであろう。

ところで、いうまでもないことだが、日本山岳会そのものとしては、今日あらためて考えなおす問題はない。会は本来の会の面目を持しておればいいので、その上で力を協せる面では力を致すということであるべきであろう。そして願わくば、日本全体の登山界の健全な発達と、水準の向上に、その時その時に応じた寄与をしようという態度――今に始まったことではないが――をもって一貫していくことを考えればよいのであろうと思う。

（完）

新組織につき疑義のある方は、当会より日本山岳協会へ出ている松方、加藤(泰)、辰沼、大塚、松田の各役員にご連絡下さい。

▶日本山岳協会の新たな組織作りに▼ついての考え方

昭和三五年四月、社団法人日本山岳会と全日本山岳連盟は、当時の登山界の情勢から、両者が母体となって日本山岳協会を結成し日本体育協会に加盟、以来五年を経ました。

今日、日本の登山界が当面している多くの問題を考察するに、海外にはここ数年来多くの登山隊が出、また国内の登山人口の増加に伴なう遭難事故の多発、そして自然保護問題など、どの件についても大きな問題を内蔵していることがうかがい知れます。特に遭難防止については、その対策が今や社会問題となっている現状であります。

この実情に対し、適切に対処し諸団体の要望に充分に応えるには現在の協会の組織では不十分であることはかねてより指摘されているところであります。また、日本体育協会加盟団体としての協会の組織形態からしても、各都道府県体育協会加盟山岳団体を直接の下部組織に持たない現協会の組織は、結成当時としては暫定的措置として容認されたものの、今日に至ってはその組織・規約を全面的に改正する必要があると思われます。

かかる状況のもとに開かれました本年度の役員総会の席上、全日本山岳連盟より提案された「協会組織改正に関する件」は慎重討議の結果、その主旨として「各地方県単位団体の積みあげの上に協会が組織さるべきである。」との考え方は全員の賛同を得ました。そして、今こそ古い殻を脱皮し、よりよき協会の新しい組織作りのため、全員が理解と協調の基本精神にもとづいて、新しい組織を推進せしめるよう努力することを確認いたしました。

具体的な細部にわたっての原案作りは、協会常務理事会に付議され、それ以来鋭意検討を進めましたところ、大要下記「**協会の新しい組織構想**」の通り基本的構想について意見がまとまりましたので、ここに広く内外に声明し、全国の登山団体の御協力を得たいと念願する次第であります。

特に各都道府県体育協会加盟の山岳協会または山岳連盟におかれては、全国の岳界を一本化したいという本協会の新方針を御了解の上、それぞれの県内において既成の組織にこだわらずに、なるべく多くの登山者を組織化されて新協会に御加盟下さいますよう御願い申し上げる次第でございます。

昭和四〇年八月八日

日本山岳協会

臨時役員総会

協会の新しい組織構想

一、目　的

○本協会は、日体協加盟団体として、正しい登山を指導普及してその健全な発達を図り、登山を通じて国民体育ならびに文化の向上に寄与することを目的とする。

二、組　織

○都道府県体育協会加盟の山岳団体（以下「加盟団体」という）をもって組織する。

（註一）なるべく多くの登山者を組織化するという協会の新方針に沿って、各都道府県においても既成の組織にこだわらずに、なるべく多くの県内登山者を組織化していただきたい。

（註二）それぞれ各地によって実情が異なるのが現状なので、ケース・バイ・ケースで組織化に御努力願いたい。

（註三）全国高等学校体育連盟登山部などの団体については、別に考慮する。

三、評議員会

○加盟団体（各都道府県）より二～五名（組織の大小により）の評議員を選出。

○評議員会は本協会の最高意志決定機関で、原則として毎年一回年度初頭に開く。

○協会の運営方針（規約、事業

鹿内辰五郎の思い出

武田久吉

酸ケ湯の名物男鹿内辰五郎が死去したそうである（『会報』二三九号九頁）。彼は明治十三年八月の生れというから、私よりも二年半許りしか年長にすぎない。あの頑健な体のこと故、摂生さえしたら九十歳位まで生き永らえたであろうに。彼の姓は鹿内と書くが、シカナイだかスカナイだか、どうもはっきりしない。第一酸ケ湯もスカユかシカユか。傷付いた鹿が、あの湯をあびてなおったというような、伝説めいた話を聞いたような気もするが、遠い昔のことであるから、判然とは覚えていない。

それはどうでもよいが、あれをスガユと読む人のあるには聊か面くらった。記録映画《日本の国立公園》完成記念として、昭和三十九年十月一日に、三和銀行で出版した『日本の国立公園』三二頁にローマ字までそえて、そうあるのは、誰の指導によるものか、気の小さい私など、たじろかざるを得ない。それのみでない。八平の一部に、黒谷池（くろだに）というのがあって、そのような英語がついているのも本当の名ではあるまいに（同書三三頁）。

初めて鹿内の顔を見たのは、大正十四年七月の下旬、その当時は青森から横内まで、乗合馬車が通っていただけで、あとは徒歩によるより別に致し方がなかった。酸ケ湯に着いた一行四人は、入口で草鞋脚胖を取って、どこに置こうかと、左右を見まわして居ると、この辺に置けば無くなる故、座敷に持って行けと云われて、一寸躊躇したが、実際こゝの宿では、履物は万人共通らしく、草履でも何でも、ぬいで置けば、いつの間にか無くなっている。

その翌日から連日、鹿内は私共の案内として、大岳、井戸岳、赤倉岳、石倉岳をはじめ、山中諸所に、約一週間の伴侶となった。

彼は赤い紐のついた真鍮のラッパを肩にかけ、腰に銀笛をさしはさんで、私達の弁当や水筒を持って同行した。登り乍ら銀笛を吹くと雷鳥が舞い下りて来るなどと言って居たが、彼が雷鳥の雛だと指示した鳥はヨタカに外ならない。

山頂で私達が観察や撮影に熱中している間、彼は炎天下に雷の如き鼾声を発して寝て居る。そして目を瞠すとたんに立ち上って、起床ラッパを吹くという愛嬌者であった。その代り、預けた水筒はいつの間にか空となっている。

あの頃には、井戸岳へ行くとなると、往きも帰りも大岳を越えなければならなかった。だが、大岳谷地には仙人垰などいう当世風の名が無いだけでも嬉しかった。その上今のように荒れ果てては居ず、いくつかの小池が乾燥して、そこに生える植物相の変化して行く有様が、面白く眺められた。そして北海道では稀でないが、本州では外で滅多に出会わないヒメワタスゲが生えて居たのが、今は絶滅に瀕している。

彼の得意な話の一つは、明治三十五年一月に行なわれた弘前の第五聯隊の雪中行軍の時、自分は雪中を徒らに右往左往せずに、雪洞を掘って中に静止して、体力の消耗を防いだので、生命には別状なかったと言っていた。この不慮の遭難を、村井女史は「雪の進軍」と呼ばれるが、若しそれが「雪の進軍氷を踏んで云々」の軍歌と結び付けられるなら、これは八甲田山とは関係のない事である。

彼のも一つの自慢話は、十糎以上もあるヤマナメクジを丸呑にすることであった。塩でもかけて粘液を洗い落してからかと尋ねたら、その粘液が好いのだと答えた。生のまゝ、水又は酒に浮かして、グッと呑み込むのだといったが、実行して居る場面を見たことはなかった。

（次頁へ続く）

役員、その他）の決定

四、理事会

○理事二〇～三〇名（うち会長一、副会長二、専務理事一、常務理事五～一〇）は、評議員会で選出。（ほかに監事二）

○理事会は会務執行機関として評議員会で決定された方針に従って会務を執行。

○年三～四回開催

五、常務理事会

○理事会で互選された専務理事と常務理事で構成。

○理事会から委任された事項および緊急に処理しなければならない事項を執行。

○随時開催

六、事務局

○理事会（実質的には常務理事会）の指揮をうけて協会の事務を処理。

○有給の専任事務員若干名をおく。

七、分担金

○加盟団体は所定の分担金を納入

○分担金の額は、各県の組織の大小により（評議員定数と同じ区分）四段階とする

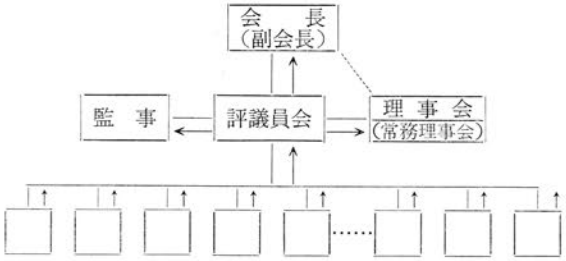
○絶対額は更に十分検討の上、あらためて案を作成する

八、その他

○現在の常務理事会は、協会の改組準備委員会のような性格と任務を持ち、この組織作りの推進母体となる。

○早急に評議員会を開催し、新組織の発足を図る。

〔組織構成概念図〕



各加盟団体（各都道府県体育協会加盟の山岳団体）

スイスと欧州の最高峰

脇坂順一氏が会報第二四〇号でスイスの最高峰はモンテ・ローザ、欧州の最高峰はモン・ブランとしておられるのに対し、私は前者（国内）をドーム、後者をコーカサスのエルブルーズとしました。田中栄蔵氏の調べによると、やはりスイス国内の最高峰はドームだとスマイスも書いているとのこと。又、ソ連のコーカサスは欧州に入っていますからモン・ブランより高い Elbruz (Minghi Tau, 5595 m が欧州の最高峰となりましょう。

（吉沢）

かって小杉未醒、大町桂月の両氏が酸ケ湯に滞在中、毎日その室に伺候したある朝、色紙と硯を と言われて枕元に持っていったら「なめくぢを食ふ男ありぶな林」と書いてくれた。未醒が落款をして貰えとそそのかしたので、そうして貰って家宝にしていると話したが、実物は見なかったので、その句が村井女史の言われる通りであるかどうか私は何ともいえない。

私達はその当時、岸波とかいう若い慶応（？）の学生と偶然一緒になった。この学生も植物を採集して、その名を鹿内に尋ねていたが、何の花にもミヤマをつけるので彼に聞いたら、東京の人は何でもミヤマとつけてやれば喜ぶものだといっていた。

若い頃の彼は元気旺盛で、山から下りて来ても、休む暇もなく、家中大きな声を立てゝしゃべりまくっていた。諸方の山岳会のバッヂを古ぼけた軍服の胸に所狭きまでに着けたのが彼の正装で、晩年は衰えて仙人のようになったかは知らないが、大正当時は大の俗人であった。元来本職は屋根屋だそうだが、一生を大体酸ケ湯に暮してしまったようである。

私達が酸ケ湯をたって蔦に向った日、別れを惜しんで、地獄沼あたり迄送って来て、そこに直立してラッパを吹きならした。それは少将に対するものであると、同行の会員故山口成一君が説明してくれた。

画　吉広沼辰

岳人の奥津城（下）

古沢　肇

△二三三号から続く▽

――◇加藤文太郎氏の墓◇――

加藤文太郎氏の故郷但馬の浜坂を訪れたのは昭和三七年夏のことである。山陰本線浜坂駅で下りて、夜明けの町を海岸の方に向って歩いて行くと、加藤さんの生家はすぐわかった。町の裏通り、ひっそりとしたしもた家風の平家である。いまは加藤さんの甥（亡兄の子）加藤富吉さん一家が住んでいる。

黄菊の束を持った富吉氏の夫人に案内されて加藤さんの墓地を訪ねる。日本海に面した海岸の高見というところ、松林の中であった。加藤さんの墓は普通の角塔で、一メートル余り、正面に雄山俊哲居士、三ツ柏の定紋入、右側に昭和十一年一月六日と槍ケ岳での歿年が刻まれているが、加藤さんの法名が右に片寄って、左が空白のまま残されているのが奇異な感じである。いかにも短かい生涯を終えた氏の運命そのままのようだ。（未亡人は後年、他家へ再縁された）

加藤氏の墓と向い合うようにして、両親の墓がある。光岳浄岩居士というのが父君で、昭和九年旧五月十七日、加藤岩太郎七十一才と刻まれて、文太郎氏名入りの石灯篭一対が墓前に立っている。

☆

加藤氏が生前、RCC報告、ケルンに発表された随想・記録の多くは後に遺稿集「単独行」となって上梓された。その中の〝山に迷ふ〟の一篇は、山に憑かれた登山者の苦渋を綴って読者の心をひく。重病の父親にすぐ帰ってくるからと言いおいて、雪の山に出かけて行き、帰ってきたときにはもう父の意識はなかった、というのであるが、「父に言いたい多くのことばを私はどこへ向って言ったらよいのか――」という氏の悲嘆は、山に熱中したものなら誰しも思い当るふしがあるにちがいない。

その親と子とが、いまは冷たい石になっているのである。日本海を渡る風の寒い夜など地下の親子は一体なにを語り合うことか――、そんな感傷をさそう墓地の風景であった。

――◇小野崎良三氏の墓◇――

小野崎良三の名をもう今では知らない人の方が多いだろう。明治四十四年六月本会入会、会員番号二六八。「山岳」九年三号の会員登山報にその名前が見られるが、本会の会員としては異端といってよい。出身は秋田県、学校は慶応義塾であるが山岳部ではむろんなかった。登山歴のくわしいことはわからないが、大正の終りから昭和のはじめにかけて大菩薩を実によく歩いている。所謂、低山趣味という言葉の流行りはじめたころである。そのころ実業登山団体という変な言葉が使われたが、これも登山の一般大衆化とともに生れたような言葉であった。

小野崎氏はその大衆化の先駆となった団体の一つ日本旅行登山協会（旅行部、登山部に分れて、観光旅行という機関誌を発行した）に入って山を歩いていたが、やがて昭和五年十二月、登山部に属する熱心な仲間とともに日本登高会を創立した（慶応の登高会とは無関係）。この会は日本という名を冠しているが全日本的な会というのではない。しかし関西のRCCにも比肩するほどの会をという抱負が当時会員たちにはあったようだ。小野崎氏は会員から「トノサマ」と呼ばれ、会をリードした。

彼は生来あまり身体が丈夫な方ではなく、実践よりも理論家だった。細い長身から絞り出すような能弁には鋭い切れ味があって人をひきつけた。いつの日か仲間でヒマラヤへ行こう、そんな夢が次第に彼をとり巻くグループに生れた。戦争さえなかったら――、本当に戦争がなかったら、この夢は実現したかもしれない。

それはこの会ばかりではない、相前後して生れた登歩渓流とか明峰とか、そのころの前衛的な会がみな活動力を鈍らせ、やがて東京岳連が結成されて、「行軍登山」が行なわれるようになり、集会に「海行かば」を歌うようになって、夢は、はかなく消えた。

筆者は戦争が激しくなったころ、岳連の用件で、小野崎氏を事務所に訪ねたことがある。久しぶりの対面にもかかわらず開口一番、「君らはまだ山の話なんかしているのか、いま日本はそんな時代じゃない！」と大喝された。これが小野崎氏と会った最後となった。

小野崎良三氏は、昭和二十年一月十九日歿した。享年五十五才、実相院瑞厳良道居士、墓は小石川の伝通院にある。寺の墓地を入ると右手に代々の住職の卵形の石塔が並んでいるが、その傍にある。正面に小野崎家之墓、二ッ巴の紋、背面に昭和八年七月十六日小野崎良三建之と刻まれている。

小野崎氏に著書はなかったが、日本登高会編、三省堂刊の「上越の山」のはじめに上越登山小史を執筆している。これは彼が生涯の情熱をこめて書いたものである。

もし現代に彼が生きていたら――、ふとそう思うことがある。多分今ごろどこか海外の山で自ら隊長になってB・Cで頑張っているにちがいない。時代の境目に生きたために志を得ずに終った人、登山家としては不遇な人であった。ある人は評して彼を梟雄といったがそれは当らないように思う。

（おわりに）

大島さんからはじめた展墓の記はこれで止める。茨木猪之吉、塚本繁松、北田正三氏など書いてみたい方々があるが次の機会にゆずりたい。総括して日本では西欧の岳人の墓のように、アルペン的風景との美しい調和は見られないといってよい。どこまでも苔蒸すとか、香華の煙につつまれ、などといった湿っぽい感じがつきまとうのも日本の風土的性格からであろう。

第九回紅葉会開催の案内

静岡支部

第九回の紅葉会は左記により開催しますので、前もってお知らせ致します。詳しいことは会報十月号およびルームに掲示致します。

記

期日　昭和四十年十一月十三日～十四日（第二土、日）

場所　南アルプス寸又峡温泉寸又ヒュッテ

会費、翌日の行動その他は次号で発表致します。

▲君島久登君の死を悼む

君島久登氏のこと

広谷光一郎

君島久登君が欧州アルプスで死んだ。人間誰しも死をまぬがれないなら彼は正に死場所を得たと云えよう。しかし余りにも呆気ない運命の悪戯とも云える。

いつも彼が云っていたように彼にはまだまだなすべきことが一杯あったに違いない。それ程に彼の日常の生活は山に仕事に悉く貫らぬかれていたように思われる。

私が彼を知ったのはつい先頃の事である。

昭和三十八年十二月の富士山講習会であった……。講師の一員として何時も私の班の後を歩いていて、時々ドスのきいた声で受講生に呶鳴っていた。彼の指導ぶりは徹底的で且非常に厳しいもので、自作のアノラックにオーバーズボン、ピッケルには独特の超長バンドをつけ、時々ふり返る私の方を見てはニタリと薄笑いをしたりして、初対面の私には不気味な位の印象でさえもあった。

二度目の出合いは翌年の四月、岳沢での講習会である。二度目でもあり色々と話す機会もあったが、実に几帳面であると同時に大変な世話すきで、人の世話をするにも徹底していたし、又、私のことも人に聞いたのか、「先輩〳〵」と何かと立ててくれたようであった。

その春山の帰り、折井さんから夏の新潟国体に二人で行って見ないかと話があり、彼との親しい附き合いが始まったのであった。

以来、国体、七月北岳、十二月谷川、一月富士山、三月吾妻と登山にスキーに研究会に何時も私達は山行を共にするようになった。

たった一年余りの間だったけれど、お互いサラリーマンとして時を合わせてよく行ったものである。国体の開会式ではユニホームがないからと婦人会の茶席を荒したり、山では野営したり、そして彼の育った北岳では人の気を知ってか知らずか無闇に飛ばしてみたり、「年忘れ谷川スキー」では散々人に飲ませておいて自分がおど気て見たり……実にユーモラスで人なつっこい性格でもあった。

東京支部での彼の活動もいつも自信に満ちていたし、面倒なことでも積極的に、又、いつかのビヤーパーティでは特別だと云ってこっそりと何杯もおかわりを許してくれたりして大いに茶目気を発揮したりした。

彼の出発に際し私は仕事で不在だったが会社の電話メモに「出張中とか、出発までにお逢いしたかったのですが残念でした、では行ってきます」と記されていた。

そして事故を知った翌々日、「前略、急に決ってシャモニーまで来てしまいました。二度山に向いましたが雪が悪く有名なブレンバ尾根に登っただけで……昨日から降雨で、明日も休養ということになりそうです。……御挨拶が遅くなりましたが、また、土産話をたくさん持ち帰ります。君島生」とあったのが彼の絶筆となった。

正月のある日、スポーツ用具店をしている松永さんの所へ伺ったら、彼は松永さんの試作したモダンなスカイブルー色のサブザックを私に奨めて「山岳会の仕事でこれからもよく同行するだろうから一つお揃いでいこうではないか」と、そして今、彼の遺品として残ったボロボロのリュックがその一つであった。

思えば短かい附合いではあったが葬式のすんだ今となっても彼が死んだとはとても信じられない。「広谷さん、大部しごかれましたワ。」と云ってヒョッコリ帰ってくるような気がしてならない。

どうか安らかにモンブランの麓に眠りたまえ！ 唯々冥福を祈るばかりである。

君島君の遺骨を迎えて

鈴木　郭之

七月二十六日、午後八時半、羽田空港のA室には、東京支部委員、君島久登君の遺骨を迎える為に遺族の方々や山岳会関係を始め桜門山岳会、帝都高速度交通営団の方々や、多くの知己友人達が夫々悲痛な面持で続々とつめかけて来た。祭壇が飾られた部屋には入りきれず、廊下にあふれて人垣を作っていた。その人々の悲しみを一きわさそったのは未亡人に連れられた今年二才のチコちゃんの無心な姿だった。まだ死という事が判断出来ない年令のチコちゃんは船の絵を見る度に「パパはこのお船に乗って帰って来るの」と言っているとか。黒い背広を着た奥野氏（未亡人の実兄）が家の裏庭から入って来ると間違って「あ、パパが帰って来た」と言って飛び出していくそうだ。横浜まで見送りに行かれて、船が出る時チコちゃんの泣いて悲しがるのを見ていた神谷さんが後でしみじみと言っておられた。「未だ若いのに、出来るなら私が代ってあげたいんだが……。」と。

税関、出入国管理局の特別の計らいで四人空港の中まで入る許可を得たので君島君の岳父につきそって松田、関口両氏とともに十九番ゲートに出て行った。毎日新聞の相沢氏も心配そうにゲートに出て待っていられた。赤と青の標示灯のきれいな広い滑走路は黒い夜空と一つになっていった。めっきりと白髪の増した岳父の後姿は懸命に悲しみに堪え乍ら痛々しくも亦やつれ果てて見えた。刻一刻と飛行機の入って来る時刻が近づいて来る。岳父はこの瞬間をあの遭難の報に接してから一日千秋の思いで待っていられたのだ。自分の目で彼の死を確める為に。本当に自分で納得する為に。そしてそれを冷厳な現実として引き受ける為に。

彼の突然の訃報が調布の彼の留守宅にもたらされたのは十九日午前一時頃である。新聞記者が押しかけ山岳会から辰沼、大塚、松田理事がかけつけた。そして山梨支部の三井氏から甲府の実家（山梨県甲府市宝町一ノ二三君島光喜方）へ。取るものも取り合えず上京された岳父と未亡人の実兄奥野氏を囲んで翌二十日三井物産の会議室で近藤等氏を中心に、折井評議員、加藤、辰沼、飯野、松田、関口が集まり、討議に移った。如何せんまだ新聞だけの情報で実際の情況がつかめず単なる臆測にとどまらざるを得なかった。信じ得べからざる遭難死、亦信じたくない彼の死が曖昧模糊とした状況に置かれていたその当時、岳父始め、遺族の方々の心痛は如何ばかりであったろう。シャモニーは余りにも遠かった。翌日三井物産のパリ支局の活躍によりテレックスが入り、二十三日ジュネーヴでだび、二十六日スイス航空五〇四便で急ぎ倉知君が帰朝するという報告が入った。直ちに関口、富田氏と調布の留守宅へ御伺いし岳父並びに義兄に御目にかかり空港の出迎え、御通夜、告別式の段取りがきめられた。

刻一刻と時がきざみ続けた。そしてそれが現実となる瞬間が来た。黒い空からあっという間に一つの巨体が滑走路に滑り込んで来た。赤い尾翼に白十字のスイス航空機だ。「あ、入って来た。あの飛行機だ。」と思わずに口に出すとその瞬間岳父は一人がっくりと壁にもたれて、あふれ出る涙を眼鏡の間に指を入れて押さえていられた。今までじっと堪えて来た悲しみが、ひたひたと迫る現実を前にして一度に涙となってあふれでて来たのだ。タラップがつけられる。扉が開く。上の送迎人用ゲートからどっとどよめきがわく。人々が降りて来る。私達は一斉に倉知君の姿を探す。前から五、六人目リュックを背負った倉知君が、白い布に包まれた遺骨を胸に抱いて降りて来た。彼は、君島は、箱に入る位にあんなに小さくなっちゃったのだ。本当に死んだのだ、私達五人の前に倉知君が立った。岳父は「よくこんなに早く帰って来てくれました。有難うございます。有難うございます。」と言い乍らその遺骨をうけとるとそのまゝ遺骨を抱いたままそこに坐ってしまわれた。立つという気力はこの待っている間に全部出てしまったのだ。「有難うございます」と何度も繰返えし乍ら彼の声は涙で消えてしまった。君島の親不幸者奴！ もう誰もいなくなったゲートに、しっかりと遺骨に取りすがって泣いていられる岳父を囲んで、私達も一諸に泣いた。裏口から岳父は関口氏に伴われてA宅へむかった。岳父からA室の祭壇へ遺骨が安置された。「こんな姿になって帰って参りました」。関口氏の後で語るところによれば目がかすんでその時の状況がよく分からなかったそうである。唯チコちゃんが不審そうに言っていたとの事。「パパ帰ってこないじゃないの。」松田氏に今までの経過を聞かされた倉知君は特別に別室で入国処

理と税関手続を終え、A室へ向った。十一時を廻ったにも拘らず人々は残っていて廊下にまであふれていた。倉知君の焼香の後、初めて彼の口から当時の遭難の模様が語られた。一言も聞きもらすまいとくい入る様にみつめていた未亡人の真情は私達の推すべからざるものであった。

翌日は調布の自宅に安置。二十八日夜六時半から御通夜。遠路にも拘らず続々と人々はつめかけた。

八月一日、日曜日、実家のある甲府の瑞泉寺で告別式が盛大に営なまれた。葬儀委員長は三井松男本会山梨支部長。本部からは加藤、深田、大塚、松田、飯野、川崎理事、神谷評議員、東京支部から沼倉委員長を始め、関口、広谷、中、小味、鈴木（和）、倉知、富田、鈴木（郭）諸委員が出席した。各界から集った花環が境内に所せましと並び、照りつける暑い夏の日ざしの中を読経が静かに流れていった。その中で忙がしく鶴城山岳会の方々が献身的に働らいていられた。松方会長の弔詞を加藤常務理事が代読した。続いて関係各界からの弔詞が捧げられた。当日も桜門山岳会の初見一雄氏始め多数、亦帝都高速度交通営団から安藤課長、畑中係長、亦彼の同僚多数が出席されていた。関係者のしゅくとして居並ぶ中を焼香者が長い列を作った。

午後四時湯村温泉常盤観光ホテルにおいて引続き七日法事が営まれた。集まる人凡そ二百人余り、思い出話の中に送りそばを頂き六時近く終りをつげた。さしもの照りつける太陽も取り巻く山の端に落ち始める頃、私達は東京への車中の人となった。あれから数週間。私達には彼の死が実感となってこない。そして遺族の方々にはこれから新しい厳しい毎日が続くのだ。

彼の人となりは大変几帳面で、何でも進んでやったものだ。ルームの引越しも彼に負うところも多い。流し台のタタキ、扉の看板書き、思えば皆遺作になってしまった。彼は又何でも屋である。お花もお茶もたしなむ。ヤッケやオーバーズボンは自分で作る。亦彼の馬力は大したものだ。山でも人一倍重いものを進んで持つ。彼のお蔭で穂高の山頂でアサヒスタイニーを飲めたものだ。一諸に行ったフランス山岳会の二人は、だから彼の事を機関車と呼んだ。その後彼は事ある毎にそう呼ばれた。フランスからの手紙にも「私の親愛なるロコモティヴよ」と書かれてあった。そのロコモティヴも永久に走らなくなった。彼の最後の日記を次に記そう。（彼はまた日頃から豆に日記や記録をつけていた）この日記の言葉で絶筆になっている。

「黒い鳥という酒場でビールを御馳走になった。とても美味しかった。この黒い鳥は山で死んだ死者を食べて生きているというのだそうだ。……オヤスミナサイ。」

国際アルピニスト集会と君島久登氏の事故顚末報告

倉知　敬

君島氏と僕の二人が、七月にシャモニーで開催された国際アルピニスト集会（le Rassamblement International d'Alpinistes）に参加する様、山岳会から推薦を受けたのは、五月十四日のことだった。

まさか、こんな悲しい結果になろうとは夢にも思わず、僕等は出発までに残された約一ケ月の間、毎日の様に連絡をとって準備に奔走し、やっと安いソ連回りの切符も手に入れて、六月二十八日アタフタと日本を発っていったのだった。

国際アルピニスト集会とは、二年に一度、フランス山岳連盟が、青少年スポーツ省の後援の下に、世界各国（今年は二四ケ国）から二名づつの登山家をシャモニーの国立登山スキー学校に招待し親善登山などを行うもので、日本からは以前、岡村崔氏や石田嘉一氏等がこれに出席されたことがある。（山岳五十六年参照）

尚、案内人としてフランス山岳会から数名と、ガイドが数名参加するが、今年はテレイ、コンタミーヌ、ポレー・ヴィヤル、パイヨの四名のガイドが参加した。

この会の趣旨は、やはり国際親善ということであろうが、又こうした登山学校などの進んだ施設をフランスが世界に広く宣伝しようという意図もあるのかも知れない。学校で行うといっても別に決められた訓練のためのコースがある訳でなく、学校の寄宿舎に同宿した各国の参加者は、お互に好きな者同志、好きな山へ登っていればよい。制限はただ、山がモンブラン山塊に限られること、出発と帰着の時に報告の義務のあること位である。

だから、とても気楽な雰囲気で参加して居られるが、それだけに、仲よくやって親善の実をあげるべき社交も必要であり、又自国の登山様式などを紹介する意味から、登山の実践の方もりっぱにやってのけなければならない。だが、これから述べる様な事故の為、今回は業半ばにして欠席し、この大役をはたせなかったのは非常に残念なことだった。

今年の集会は七月十二日（月）から三十一日（土）までの三週間行なわれたが、あの事故が起ったのは丁度開会以来一週間目のことだった。最初から順を追ってシャモニー到着以来の経過を簡単に報告するならば、まず僕等がシャモニーに着いたのは七月十日の朝のことだった。

早速学校に出頭すると、まだ準備整わずということなので、附近の山荘に宿をとり、折りから晴れ上ったモンブランを見物するべく、その日は対岸のブレバンの展望台へ登って過した。翌日は、まずは足慣らしと、モンブランの一般登路の一つであるボソン氷河を登ってみた。前々日まで雪が降っていたとのことで、意外に雪深くしかも湿った雪で、ひどく消耗する羽目になった。結局、グラン・ミュレの小屋まで往復するだけに終ったが、それも最終ケーブルに間に合わず、駅の前のキャンプ場で最初からビヴァークなどする始末だった。今から思うと、この日の君島氏はひどく調子悪く、相当バテ気味だったが、この影響が後々までひびいてしまったのかも知れない。

十二日にはいよいよ集会が始まったが、その日は夕方集会室に全員集まっての顔合せのみ。席上、フランコ校長より

「これから、この集会を進行していくのは他ならぬ君達だけなのだから、皆で話し合ってうまくやって下さい」というような挨拶があり、流石にフランスらしい気のきいたやり方だと、感心したものだった。

さて、翌十三日は快晴にめぐまれ、全員三々五々好きな者同志山へ出掛けていったが、僕等はまだ山に慣れないし、二人だけで登ることにした。

僕等はまず何とかモンブランに登ってみようと思い、ルートに仏伊国境稜線のブレンヴァ稜（Arête de la Brenva）を選んだ。

この稜は、映画「真昼の星」の中で紹介されている美しい雪稜で、グレードは四級。途中ジャンダルムの岩登りもあり、周囲の景色も抜群、最初に手がけるには申し分ないものだった。午後三時頃、エイギュ・ド・ミディのケーブルの駅を出発し、ヴァレ・ブランシュを横断して、四時間程で稜上にあるフルシェの避難小屋に到着、その日は三五〇〇米のその小屋に泊った。

翌日は約九時間をかけ、この急峻なヤセ屋根を登り切ったが、やはり雪の状態悪く、その長大なことや高度のせいもあって、僕等にとっては相当なアルバイトだった。天気が悪化し、一時的に強い風雪におそわれたため、ブレンヴァ稜がモンブランの主稜線に合うモン・モディの肩へ出た所（四二〇〇米位）で引き返し、モンブラン・ド・タキュールを越えてミディの駅へ引き返した。ところが又ケーブルの時間に間に合わず、その日はコル・ド・ミディの廃業され、こわれかかった避難小屋でビヴァークということになった。やはり、いきなり四〇〇〇米辺りでヴァリエーションをやるというのは、慣れないだけに予想外に苦しい。だが、とにかく無事やってのけたので僕等はとても気をよくして山を下りたものだった。

その後、三日間悪天がつづき、ずっと学校でブラブラ暮して最初の一週間は過ぎ去った。そして、次の日曜日、運命の日がやって来た。君島氏はその前日、テレイとコンタミーヌの指導の下にメール・ド・グラスで行なわれたアイス・テクニックの講習に出掛けたが、僕は所用のため欠席した。彼が御機嫌で帰って来て熱心にその様子など聞かせてくれたのは、今では忘れることの出来ない思い出である。

十八日の日曜日は、前日から山に居ればともかく、学校は日曜は休みなので、どう一日を過ごそうか思案のしどころだったが、天気も回復したし、軽いトレーニングのつもりで最初はブチ・シャルモをやる予定だった。だが、モンタンヴェールまで登山電車で登ったものの、時間の遅れと体の調子や気の進まないのを理由に、途中でその計

画は取止めにした。そこでシャルモの前山のフレート・デ・シャルモの方へ写真など撮りに行こう、ということにしたのだが、それが今から思えば間違いのもとだったのだ。

プチ・シャルモの方へ行く道から左にそれて、僕等は広い草付まじりのやさしい岩場を登り出したが、巾広い所だし頂上も長い稜線となっているので、自然に二人とも勝手に自分の好きな所を登るようになり、いつの間にかはなればなれになってしまった。別れたのは大体午前十一時頃だったろうか、事故はその間に起った。彼は翌朝別れた地点よりずっと右よりの、岩場の一番下部で死体となって発見されたのだ。一体どういう状況の下にこれが起ったのか、明らかでないが、おそらく何かのはずみに足をすべらせ、運悪く不自然な体勢になったまま止めることが出来ずそのまま滑落してしまったのだろう。全く何でもない岩場だったのに、いや、何でもない所だけにいつもの慎重さを欠いたのかも知れない。それとも何か考えごとでもしていたのだろうか、そうだとしたら一体何を考えていたのだろう。それにしても……と、その後何度も考えてみたけれど、彼の最後はあまりにもあっけなく、むしろ不可解ですらある。時が時だけにいつまでもあきらめられない思いだ。

フレート・デ・シャルモの稜線で、そんなことはつゆ知らず、僕はウロウロしていたが、いつまでたっても来ないので、てっきり引き返したものと思い、元の所へもどってみた所、何の気配もない。呼べど叫べど返事もないしこれは調子悪く先へ帰ったのだろうと思って学校へ戻った。帰って居ないのを知って面喰ったけれど、まだ楽観して、どこかでビヴァークしてるのだろう、としか考えなかった。だから翌朝、プチ・シャルモの方へ行く道のそばに彼を発見した時の驚きたるや、とても言葉では表わせない。頭を下に、うつぶせに、墜落したままの姿勢で彼は横たわって居たが、苦しんだ様子が全然なかったのはせめてもの救いだった。医者の診断によれば、死因は墜落による頭蓋と肋骨の骨折であった。

すぐモンタンヴェールのホテルへかけ戻り、学校へ連絡、ヘリコプターの出動を頼んだ。同時にジュネーブの領事館とパリの僕の会社の支店へ連絡し、事後処理の指示をあおいだ。それから現地の官憲の尋問を受けたり、執拗な新聞記者にせめられたり、ショックでがっくり来ている身には、あとの数日間はつらい毎日だった。

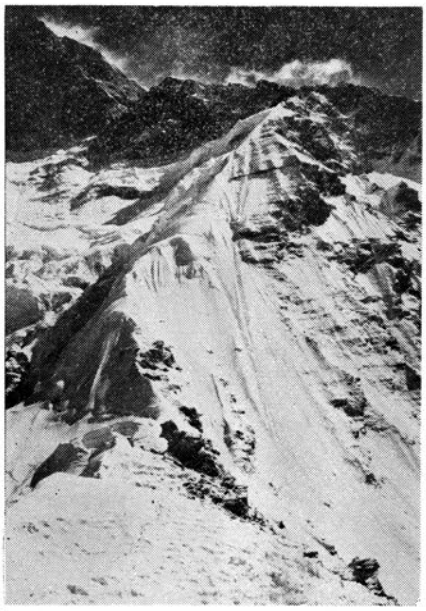
結局、二十三日にジュネーブで火葬二十五日帰国という手はずが整い、学校の関係者の好意ある協力のお陰で、すべて滞りなくすますことが出来た。特に、前の校長で、日本にも来たことのあるエドワール・フレンド氏にはいろいろお世話になった。又学校を去るに当っては、ジャン・フランコ校長にその親切な処置に対して充分礼をのべ、途中から欠席する失礼を詫びた。

二十五日、遺骨を抱いてスイス航空に乗りジュネーブを発ち、二十六日夜羽田へ到着した。空港で遺族の方に遺骨を渡してしまうと、まるで体中の力が抜けてしまうようだった。

＜早大ローツェ・シャール登山隊＞
提供写真—1965年

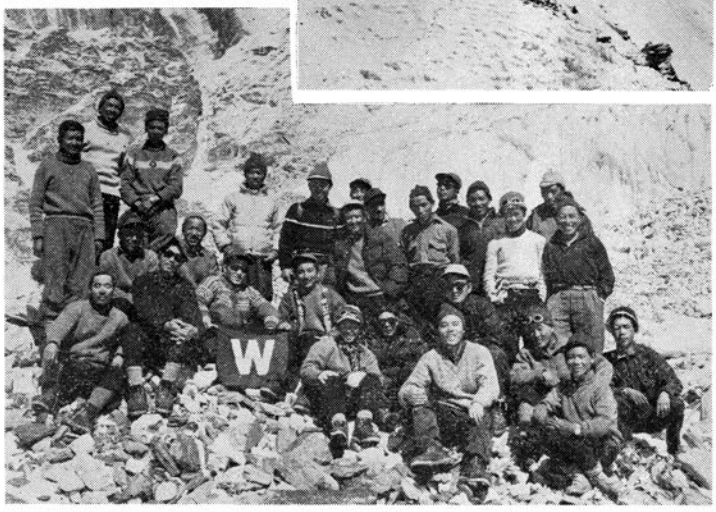
(A) 西南稜上部，C3よりC4へ荷揚げ中の隊員
(B) C1より西南稜をみる左の岩峰は頂上。
(C) ローツェ・シャールをあとに帰路につく。
(D) BCにて，登攀開始前の隊員とシェルパ達。

(A)


(B)

(C)

(D)



◇会員通信◇

アラスカ便り

芳野赳夫
菊子

東京は炎暑の頃かとお見舞い申上げます。唯今おります北米北極研究所のデバイド・キャンプは、セント・エライアス山群の中央部に当る、ハッバード氷河とカスカウルシ氷河が、太平洋と内陸に向って、大きく分れる地点にあります。

真東に、日本隊を何度か迎えたローガン峰の大きな山容が横たわり、太平洋側から流れてくる雲をまともに背に受けています。お蔭でこのあたりの天候は、ローガン周辺よりもよいようです。

ローガン峰と重なってマッカーサー峰があるのですが、これはローガンがすっかり雲に覆われたような状態の時にだけ、東峰が鋭く天に向っているのが見えます。

巨大なヌナタークの背後に、一九六一年に一度登られただけのクイン・マリー峰があります。これはマスの大きな雪峰ですが、夜晩く薄明の中で見ると、大変幻想的な印象を与える山です。少し東に目を転ずると、ハッバードの双耳峰と、最近登られたばかりのケネディ峰が望まれます。

氷河の余りの巨大さに、最初はその大きさが、瞭きり掴めなかったのですが、一番広いところで一五キロはありそうです。かの有名なマラスピナ氷河に続くセワード氷河に至っては、二〇キロ以上あろうかと思われます。

これらの巨大な氷河を囲んで、名のある高峰の他に、いまだ正確な測量もされていない無名の秀峰が無数にあります。これらの山々を眺めながら、少なくとも登山に関しては、無為に過すこと一〇日余り、何せこの研究所の研究員ということで来ておりますので、仕事そっちのけで山登りの計画をたてるわけにもいかず、氷河上の誘電率の測定のみに終始しておりました。防大のローガン峰登頂のニュースを聞くにつけても、少々心もとなく思っておりました。

然し待てば海路のみでなく、山にでも日和がある筈、とうとうその日がまいりました。

当研究所の責任者であり、またかってアメリカ山岳会の会長をされたこともある、ウッド博士が、三日にキャンプに来られました。氏はこの山域についての第一人者で、一九二〇年代から多くの初登をされた方でもあります。

私どもが山登りをしたいという意向をちょっとほのめかしただけで、十分過ぎるほどに私どもの意を汲んで下さり、早速この山域の山についての説明をして下さいました。「山日記」の山名表をお見せしますと、アラスカ・カナダの山についての記録修正をして下さいました。（いずれ帰国してからお目にかけたいと思います）

又、登山についても幾多の適切な示唆を与えて下さいました。かねて狙っておりましたクイン・マリーの第二登についても、是非やってみるとよいとのことでした。又、そのトレーニングとして秘かに偵察しておりました、キャンプの丁度北側、氷河の対岸にあるホワイト・ドーム（三五六〇mの山より一〇〇m以上高いが未測量）はどうかと申しますと、あれは高いし未登の山だから、とても興味があるということで、これまた勧めて下さいました。

好天を待って六日午前四時にキャンプを出発しました。氷河を歩いていたのでは五時間も六時間もかかってしまいますので、測定中に偵察しておきましたヒドン・クレバスを避けながら、大きなクーロワールの奥まで、スノー・トボガンを使って入りました。

懸垂氷河をクレバスを避けて登りつめると、ドンジュック氷河の源頭に出ます。北々東から昇る朝日がさし込んで、非常に美しい景観を呈しています。氷河のコルからホワイト・ドームの手前の稜線のコルに出るつもりだったのですが、ここは非常に大きなベルグシュルンドが口をあけ、その上に雪庇がかぶさっており、とても問題になりません。そこで手前のピークに続く急峻なリッジをたどることにしました。雪がしまっていてよいのですが、雪庇を避けて北側にまわると、氷の壁になっておりそのスケールの大きさに少々圧倒されてしまいました。手前のピークまで八ピッチ、スタカットで登りつめると、あとは幅の広い雪稜がドームの頂まで続いています。山頂についたのは、九時少し前でした。

ドームの頂からはキャンプからは見えなかった北面のルカニア、スティール、ウォリシュなどの山々が、真青な空を限って屹立しており、しばらくは写真をとることも忘れて感にたえておりました。

ささやかな山頂ではありますがこの山域で日本人の踏んだ最初の処女峰かと思います。年月日と名前を書いた紙を缶に入れて山頂の雪に埋めました。

最近になく上った気温のために下山の頃は雪が非常に不安定になり、思いの外の時間を要しました。とりついてから七時間半のアルバイトでした。

目下、クィーン・マリーに登るチャンスを狙っておりますが、三人以上の方がよいと言われておりますので、果して、かなえられますかどうか。登れましたらお知らせ致します。

なお、お約束した山頂の石は、スノー・ドームのため拾えませんでしたが山頂の下で拾いました。

乱筆にて失礼。（吉沢宛）

（注・日付なけれど、ホワイトホース・八月一一日五時半PMの消印あり）

グリーン・ランド登山隊便り

宮原巍

六月二十八日横浜港出港、ナホトカへ向う航海は穏やかで快適でした。シベリアの旅はハバロフスクに一泊してから一週間の旅でした。この間列車は常に長距離客で満員でしたが快適な旅でした。七月八日にモスクワに一泊し東独のビザをとり、七月十一日朝無事コペンハーゲンにつきました。この間、私のパスポートに割印が押してないため、ソ連、ポーランド、東独各国境でトラブルがあった以外は何の問題もなく、心配していた荷物の輸送も、コペンハーゲン迄一個の荷物も開梱されることもなく（通関に際し）、また荷物代もとられませんでした。たゞ荷物の量としては限界を感じました。

七月十二日、大使館に挨拶の後

グリーンランド省へ出頭し、K・G・Hの船にのるための許可をお願いしてきました。今年は英国隊とフィンランド隊と私達の三隊が入るとのことです。グリーンランド省ではグリーンランド入国の規制案を目下検討中とのことでした。デンマークはグリーンランドに関して保護政策をとっており、その自治を認めていますので、指令等の権限などは持ち出さない様にしている様です。貨幣もグリーンランド貨幣に換えなければなりませんが、これはK・G・Hで行ないます。この船会社での乗船手続は、予めグリーンランド省の連絡があったゝめ簡単にすみました。

尚グリーンランドの地図は一般には無制限には売らない様ですが私達は地理学会にいって、目的を話し、パスポートの照合など行ない購入しました。1/5万、1/25万、1/100万全図があります。一枚四〇〇円程度です。1/5万は海岸線にそった部分しかなく、途中までしかありませんでしたが、それでも全部で20数枚になりました。

七月十三～十四日、食糧、器具を調達し、十四日に梱包して船会社に引渡しましたが、食糧品が以外に安くて幸いでした。

コペンハーゲンよりアングスマリック迄の船賃は一人約四五、〇〇〇円でこの他に若干の荷物代をとられましたが、アイスランド経由空路の場合と較べれば遥かに安く上ります。

船の出港が二十一日迄のびたので、十五日は自由行動、十六～十七日にかけて歯科の大谷先生と南スエーデンを旅行してきました。

愈々明日は出港ですが、グリーンランドに上陸してからは十分に慎重に行動するつもりです。こちらの新聞、テレビにも大いにサービスしてくるつもりです。

コペンの街にも漸やくなれて、ふっと東京にいる様な感じがすることもあります。コペンハーゲンへの帰着は九月二十日頃の予定です。会の皆様に宜しくお伝え下さい。

（コペンハーゲンにて、七月二十日付、松田宛）

オクシャパルカ5880m初登頂他

早稲田大学ペルー・アンデス遠征隊

事務局長　高三公一

拝啓　残暑の厳しい折、いかがお過しでしょうか。

当早稲田大学ペルー・アンデス遠征隊出発前には貴重な御指導を賜わり有難く御礼申上げます。

お蔭様をもちまして、遠征隊は6月4日全員リマに集結後登攀根拠地ワラスを経て、7月3日ネバド・ランラパルカの登頂、7月10日ネバド・オクシャパルカの初登頂にそれぞれ成功致しました。

その間の現地よりの報告によれば、高度馴化や天候不順、その上アメリカ・コロラド山岳会遠征隊との先陣争い等、種々の障害に悩まされた模様ですが、数々の御支援を賜った皆様に、前述の如くその成功をお伝え出来ることは我々一同の歓びとするところであります。同隊は7月中旬リマへ戻り、約一週間の休息、準備の後次の目標であるワイワッシュ山群のネバド・イエルパハ登攀を目指して鋭意邁進致しております。

遠征の経過等いずれ改めて詳しく御報告申上げる所存でありますが、取敢えず御礼旁々御報告申上げる次第であります。　敬具

注・オクシャパルカ初登はアンデスにおける本年度最高業績の一つ。（吉沢）

自然保護委員会のこと

村井米子

一昨年秋、上高地で開かれた支部長会議で盛り上ったこの問題は焦眉の急の上高地ロープウェイ反対の為、松方会長、渡辺副会長、折井常務理事、交野評議員と村井とで協議、とり敢えず決議文を発表した。既に会報に記載「山と渓谷」その他諸新聞、雑誌がとり上げ、相当に一般に伝えられた。関係方面へは日本自然保護協会、国立公園協会および厚生省国立公園局長等へ、書類と口頭で村井が伝達した（松方会長渡米中のため）。

委員も、松方会長を委員長とし各支部長と武田久吉、日高信六郎渡辺公平、藤島敏男、神谷　恭、深田久弥、足立源一郎、田中薫、古沢肇、福井正吉、交野武一、村井米子と国立公園協会常務理事千家哲麿（旧会員）諸氏に委嘱されたが係の交野氏多忙で会合なし。

上高地問題は放って置けぬため村井は、去年七月の国立公園大会後の田村剛氏等自然公園審議委員の調査に同行、上高地の現地でその計画の不適な点を指摘した。

昭和四十年度より杉浦耀子氏を担当理事とし、松方、村井とまた渡辺公平、折井健一諸氏も参加、目下緊急の問題を日本自然保護協会常務理事の石神甲子郎氏を囲んで研究討議を重ねた。

自然保護問題は、根本計画を建てる必要と同時に、急いで反対および変更させねばならぬ緊急問題が多々ある故である。

特に山岳関係は次の通り。「八甲田山ケーブル」＝八甲田大岳に仙人平からケーブルをかけ、その下方睡連沼まで車道を開く＝青森県の計画、自然破壊甚しく、雪崩その他遭難誘発の危険がある。

「富士山地下ロープウェイ」＝先年からの山梨県側と近年の静岡県側と二口、何れも五合目辺から頂上までの計画＝ズリや駅舎其他自然破壊甚しく、急な高度差による人体の故障等。

「上高地ロープウエイ」＝西穂の尾根を越え玄文沢から蒲田側小鍋谷へ架ける奥飛騨観光KKの計画＝西穂稜線と玄文沢間は上高地の入口大正池からも望まれ、殊に上高地ホテルの真正面である。特別保護地区となるべき眼目の地の破壊甚しい。沢田レンジャーの手許に出された昨年の申請書は一応これらの理由で返えした。調査委員等の意向は玄文沢下部にトンネルを抜くならまあまあだが、その後の新申請書はまだ出ぬが予断を許さない問題である。

「上高地大滝山車道」＝長野県の計画、松本より大滝山稜線を通し徳本峠下方上高地渓への車道＝切角、現在河童橋でおさえている車道がより深く入って上高地渓の中心地全部を荒すばかりでなく、地質的に岩石がもろく現在も大きなガレがあり危険である。調査委員がこれら理由で反対中。

「立山、黒四ダム連絡ルート」＝立山観光株式会社の計画。立山室堂口より雄山直下を通るトンネル車道を抜き二ノ沢へ出し、以下ロープウエイで新丸山に至り、再びトンネルケーブルで黒四ダムサイトに出る、延長合計六一九二メートルの案＝既に厚生省の自然保護審議委員会でこの申請を通してしまったので、着工も近く最緊急の問題である。トンネルのズリが室堂口、浄土沢に出され雄山正面の景観を破壊、黒部側の中沢、二ノ沢、ダムサイトのズリも同じく見える。

且つミクリケ池の表層の浸透水

を遮断するため水源枯渇、景観破壊の大害がある。黒四側は駅舎もダムサイト正面に見え、ロープウェイは雪崩や落石の危険の多い地点だ。三七九〇億円の大計画がなぜかくも自然破壊と危険度甚しく、反対の多いまゝ厚生省当局を通過したか不思議である。とまれ今からでも是非「御山谷迂回案」（日本自然保護協会石神常務理事案）の、より景観を保護し安全度高く、工事費も安い方へ変更させたい。

以上略述したが、可及的速かに全委員の集会を開きたい。それまで必要な手は随時打ってゆく。乞御協力。日本の山が荒れ果てぬように……。

〔パリー通信〕

小野　尚俊

度々お便り頂き嬉しく存じます。五日以来今日迄御紹介のあった二人の方（注・倉知、君島両氏）、楽しみに待っておりましたが御連絡戴けず残念です。或いは帰国の折にでも御立寄り頂けるのかと思っております。

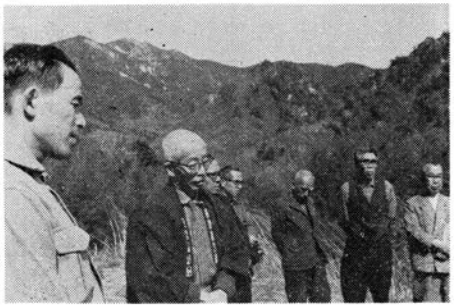
パリーは、このところ天候不順で、暑い日があるかと思うと翌日は吐く息も白いほど涼しいという様に気温の変化が激しいのです。昨日今日あたりツィードの上衣をきているのですから、日本では想像して頂けないかも知れません。では折角御自愛下さい。会の皆様にくれぐれも宜しく。

De 16, Jouillet á Paris

（七月十六日付　神谷恭宛）

金山平 木暮翁碑前懇親会報告

梨部山支



第三回を迎えた懇親会を、五月二十二日、快晴の金山平で開催した。

十五時から、支部望月理事長司会、三井支部長の挨拶に続いて、神谷恭氏が、次のようなお話をされた。

「この金山平に記念碑が建てられて、十五年を経たが、今年は天候不順で、車窓から見た南アの山々に、あまりにも雪が多いので驚いてしまった。今年も山梨支部にお世話になり、この地を訪れることのできたことを、心より喜ぶ。本部の連中にもよく宣伝しておいたが、どうも都合が悪く、集る者すくなく申訳けない。

先日、木暮先生の奥様の所へおうかがいしたが、高血圧でふせっておられ、今日のことをお話するとくれぐ〜もよろしくとのこと、御伝言があった。

今日は、先生の晩年のことを少しお話してみたいと思う。おなくなりになる一週間前にお眼にかかったが、まさかなくなるとは夢にも思っておらなかった。なくなってから、皆でささやかな記念文集をだしたが、それを当時硫黄島に出陣しておられた御子息の岳彦さんに送ったところ、父のためにこんな立派なものをつくっていただき感謝にたえないとの返書に接したが、遂に戦場の華と散られてしまった。

先生のことを一番印象深く覚えていることは、昭和十八年の暮、明治の志士、吉田松陰などの伝記を調べておられ、ある日、西郷隆盛に関する本をみつけてほしいといわれ、すこしばかり御用立てして大変喜ばれた。先生はすでに、日本の敗戦を承知しておられ、明治の青年は実にえらかったと何度もおっしゃられ、何ともいわれない悲愴な気持で帰えって来たが、戦争の末期を覚悟しておられたのは気の毒の極みであった。

先生がなくなったのを聞いて早速かけつけたが、臨終の姿は、後光がさしているようで顔は真白で、神々しい姿であった。今は亡き沼井鉄太郎君は翁のことを〝岳聖〟といったが、正に至言であると思う。

私も老いたりとはいえ、生命のある限り、此処に来て故人をしのびたいと思う。」

以上のような記念講演をなさり、暮れ行く金峯、瑞がきをバックに記念撮影をなし、あとは恒例により、山菜を賞味しつつ一献くみかわし楽しい一夜を過した。

献立は、支部の竹下礼子氏の指導により、メモと首引きで若い者が腕によりをかけた。なお酒は甲州の地酒、徳利は九州の小石原（こいしはら）、小鹿田（おんだ）、門龍寺（りゅうりんじ）の貧乏徳利。大変好評で来年は十本程見付けておくようにとの宿題を仰せつかった。ようやく夜は更け、仏法僧の声をききつつ、有井館心つくしの手打ちそばをいただき一同寝についた。

（山村正光記）

第四回海外登山懇談会

とき・ところ

十月四日（月）午後六時半

日本山岳会ルーム

中心の話題

今年のアラスカ登山

〔ゲスト〕ローガン隊長　川上　隆氏

他に高橋　進氏

多数の御出席を希望します。

東京支部の十月度三水会は都合により中止いたします。

飯豊の沢　梅花皮（かいらぎ）

五十嵐　力

前線に逆らった訳では無いが七月も二十三日ともなれば飯豊の山は〝梅雨〟もあけると云ういわゆる〝山感〟にたよって石転沢の雪渓を登った。今年の夏の訪れは遅く風流をもって知られる飯豊温泉も目下、工事を始めたばかり、大嵐尾根取付の桧山沢の橋は流失で未だ復旧はしていない等と暦の上とはずいぶん違った冷夏のきびしさをつくづくと感じた。

出合の幕営地は未だ雪に埋っているとの話で、時間的には早すぎたが温身平の小屋に泊る事にした。

長者原の〝親父達〟が五名程此処をベースにしてコースのヤブ刈をやっていたので、其晩は思いがけぬ山菜のゴチソウに有りつくことが出来た。強力な地酒（ショウチュウ）サカナはヤマニンニク、ウド、生味噌をつけおつな風味にシタを打ったものであるが、ヤマニンニクの臭いが余りにも強烈で同行の女性共に大いに嫌われたものである。翌朝陽も上らぬ四時、小屋を後にして出合に向う。上のツブテ石の附近から沢は雪がつまり梶川も赤滝も厚い雪の下にあって季節感のずれにいさゝかのとまどいを感じた。

雪渓に取付く深いガスが立ちこめてはいるものの同行の中二人の女性は昨年の新潟国体山岳競技胎内口入山式にて飯豊の女神となった〝本物〟の女神だから、天も敬意を表して天候回復に努力してくれるだろう等、冗談を飛ばして登るうちに、突然霧が無くなり天にはまばゆいばかりの朝の青空が広がり飯豊独特の色調があざやかに映っているのだ、それは何の事はない雲海の上に出たのであった。雪渓も上部に来るとかなりの斜度となり、二、三の軽装のパーティーが退散して行った。マチガ沢本谷程度の斜度となっていた。

見上げると島が一つ浮んでいる。例年ならば〝半島〟になっているところである。其の島を登り切って、左へトラバースして状態の悪い沢状を少し登りハート状の雪渓を上ると、梅花皮小屋がすぐ目の前に在った。

雪渓が多いのに比べて水場が遠くなった、それが飯豊の今年の水場で、杉原八百樹氏苦心のホースも冷夏の稜線で夏枯れをおこし十文字鞍部で風にさらされていた。

高山植物もタカネマツムシソウの紫色が全然見当らなかったが、他は大体咲き始めていたようである。ニッコウキスゲが完全に咲いてなかったのも季節のずれによるものだろう。

夕刻、お西の小屋についた。展望が素晴しく飯豊連峰がぽっかりと雲の上に浮んでる格好である。

翌朝、飯豊本山にて御来光を迎えんと三時半に小屋を発って四時半に近く蔵王の山から素晴しい陽が登ろうとしたが、上の雲が下って良いところで幕となったが、天候は良かった。今日は二つのパーテーに会える日である。

西ケ岳からふたゝび縦走路を北に出てまもなく亀山君の率いる胎内パーテーに会った。

北股の頂上で梶川尾根の伊藤君と合流、東京の浪人を一人仲間に加え門内岳で早い幕営をする。

門内岳からのアーベントロート、何とも表現の仕難い大雲海の芸術、陽の暮れる迄飽かず眺めていたものである。

鷲ケ巣、光兎、二王子、下越山々は勿論、魚沼、妙高、日光、蔵王、朝日の山群が浮び、その下の雲のショーウインドーには新潟の町が紫色に光って見えた。今回で飯豊登山二十回の記念日を迎えたが、かくも素晴しい雲海に出喰わしたのはかって六年前の夏一度と今回をもって二度でしかなかった。

七月二十六日、素晴しい星座を見乍ら夜を明す。天気図は余りよくないのに現実の何と素的な事か。四時半、蔵王連峰から現れた。太陽は今朝は雲にはゞまれる事もなくサッと上り、梅雨明けの真夏の朝の太陽を山々に投げかけた。今日は夕刻迄に胎内小屋にさえ降ればよいのだ、そこには迎えのトラックが冷いビールを積んで待っていてくれるはずである。

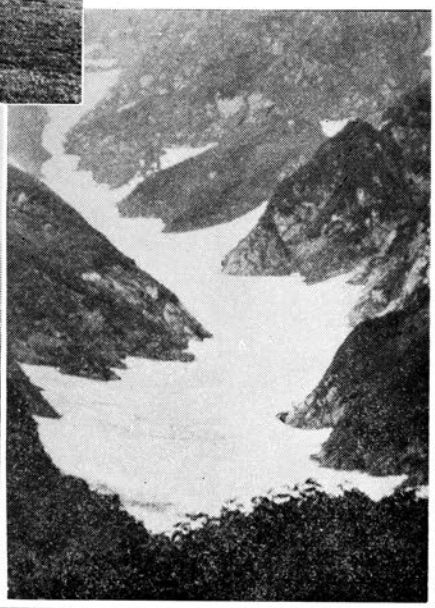
◇　◇　◇

飯豊三題

（五十嵐　力写）

お西（西ケ岳）の頂上にて＝夕立雲が会津の空に影をおとし、大日岳のシルエットが美しく西の空に浮んでいた。

北股岳の頂きに立つと連峰がずっと見渡せる。梅花皮岳と烏帽子岳が、浅いガスの中に霞んで見えた。（C）



石転の大雪渓、白馬の大雪渓に勝る巨大な雪の沢である。

中村清太郎画

▼懇親会
▼歓迎会
▼小集会
……その他▲

◈

六義園の有志閑話会

今年の有志懇談会は、小雨そぼ降る六月十九日、例年と同じ場所の小石川六義園心洗亭で開催された。会はこれで八回を重ねた由である。

この日は、あいにく新潟支部主催の佐渡旅行と重なったため、毎年顔を見せるレギュラーメンバーの中で欠席された方も数人あったが、この日の出席数はメめて二十八名。午後四時過ぎには既に待ち切れない先輩たちがチラホラ集って、糠雨に濡れた庭園の新緑を、心ゆくまで楽しまれた。

六時過ぎ懇談会開催。田部、鳥山、高木三長老の懐旧談に続いて、次々に出席メンバーから山行談や思い思いの感想談が述べられ、島田氏からは日本山岳会の創立六十周年を機会に、何かよい記念事業を起し度いとの提案があり、土曜会主人こと神谷氏の締めくくり談を以って閉会となった。

なお今井雄二、喜美子夫妻は、最近「心に山ありて」の共著を出梓されたが、この席上でもみなから大いに祝福された。この日の世話人は小野、今井（喜）、山下の三名、次回の世話人は松本熊次郎、牧野衛、坂倉登喜子の三氏にお願いすることとなった。

（山下一夫記）

〔出席者〕岩永信雄、今井雄二、今井喜美子、小野利次、神谷恭、桜井信雄、佐藤久一朗、佐藤隆太郎、坂倉登喜子、島田巽、関根吉郎、瀬名貞利、田部重治、高木菊三郎、鳥山悌成、中村謙、藤島敏男、古沢肇、松本善二、松田雄一、牧野衛、村尾金二、望月達夫、諸岡一次、山崎安治、山崎次郎、山本朋三郎、山下一夫（順序不同）

◇　◇

『ヒマラヤ隊歓迎会』

〝明治大学ゴジュンバカン遠征隊、早稲田大学ローツェシャール遠征隊の歓迎パーティー〟六月二四日、於日比谷三井ビル。

帰国まもない両隊のほぼ全隊員と来日中のペンバ・テンジン氏を迎えて、生々しい報告をスライド説明で聞いた。出席者の中で、十ヵ月にわたり広くネパール高地を撮影旅行された風見氏の紹介があったり、深田久弥氏のネパール政府の登山禁止令にともない日本からのヒマラヤ遠征も一つの反省期にあるという話、島田巽氏の十四年前人類初の八〇〇〇米峯登頂、フランスのアンナプルナ隊の報告会を高い会費を払ってロンドンで聞いたが、今夜身近な仲間からビールを飲みながら八〇〇〇米の話を聞けるということの感激、日高氏のペンバ・テンジンの紹介などスライドの途中にあり楽しい会であった。出席者八三名。

第二二七回小集会

六月二九日於本会ルーム。藤島敏男氏の〝山岳放談〟出席者六〇名。

ビール・パーティー報告

東京支部主催の恒例のビールパーティが去る七月二十一日、会員約四〇名を集めて行なわれた。お茶の水の頃とくらべ立地条件が悪いので他の場所にしたかったが、皆さんにルームになじんでいただく意味で、あえてルームで行なった。当初は屋上で開く予定だったが、当日はあいにくの雨で、やむなくルームにビヤダル二つを並べてやる羽目になった。

沼倉委員長のあいさつ、シャモニーで不慮の死にあわれた君島氏への黙とうの後、ビールがあけられ談笑の内にも話題は君島氏のことに及んだ。

一会員の発案により自己紹介が始まり、最も若い――神谷さんからやっていただく。恒例の夏山奇術講習会が勝田さんによって、ザイルさばきもあざやかに披露される。

ビールがさばき切れるかという係の心配をよそに、土曜会のお歴々、松本さん、山下さんのハッパよろしく、たちまちビールは最後の一滴までアワと消え去ってしまいました。

（鈴木郭之）

◇　◇

第二回海外登山懇談会

〔日　時〕八月二日
午後七時よりルームにて

〔参加者〕杉浦耀子、松田柳子、須田紀子、松永康子、川井通子、秋田しおみ、根本洋子、冨田美和子、山口節子、岡部浩子

〔お客〕村井米子、佐藤てる、川森佐智子、細川沙多子、小倉董子

司会　大塚博美、松田雄一

〔話題〕女性の海外登山について

女流登山家として、経験豊富な諸先輩をゲストに招いて、種々有益なお話しを聞くことが出来た。

特に、近く女性の日印合同登山の計画を持っている東京支部婦人部は、身近かな問題として、マナーは勿論のこと、喜ばれたお土産品などについても、女性らしい細かい質問もあったが、合同登山についてのむずかしい問題が話題の中心となった。諸先輩の意見として海外登山を行なうには、登山技術だけでなく、国際的な感覚と、マナー、エチケットなどを教養として身につけておくことが、すべてのことの基礎になる、とのことであった。

その他、デオ・チバ、ニュージーランド、欧州アルプスなどの登山の経験を通じ、実際的な問題について種々懇談が行なわれた。

参加者にとっては有意義で、非常に貴重な懇談会であり、今後もどしどし行なって欲しい希望があったが、係りとしては、参加者の少ないのが残念でならなかった。

（大塚）

◇お知らせ◇

ヒマラヤ眺望の旅

マナスル、ヒマルチュリー等数多くのヒマラヤ登山隊の渡航申請を取扱ってきた日通航空では、この度、ヒマラヤ山脈を眺望する観光旅行を計画、この秋にインド、ネパールに出かけることになりました。

期間・November 6~17
旅程・東京—Calcutta—Darjeeling—Kathmandu (Kakani)—Pokhara—Birathnagar—Kathmandu—New・Delhi—Agra—Delhi—香港—東京。
費用・一人当り ¥ 305,500
定員・二〇名。
締切・九月末日。

◇　◇

各員各位の中でご希望の方は左記へ直接御問合せ下さい。
千代田区大手町一ノ四・大手町ビル内・日通航空営業所
電（201）5867（担当・横尾氏）

川喜多荘太郎氏筆

お知らせ

イラン山岳会員 Mr. MEHDIZADEH 来日の件

八月十二日の常務理事会当日イランの The Mountain Climbers Club of Teheran の会員 Mr. Mehdizadeh 氏がルームを訪ねてきた。

同氏は同会からの紹介状を有し約八ヵ月滞日するが、イランのデマベントにも比すべき富士山には是非とも登山したいそうである。同氏は英語は話さず通常の会話はペルシャ語であるが日常会話には困らぬ程度の日本語は話すことができる。会員諸氏の中で山行にお誘い下さる方があれば幸いである

(電)二六八―七一〇六～七、内線四〇七番

なお同氏は同会より本会宛にモザイクの額縁入のデマベントの写真を持参、寄贈されたので、本会からは「山岳」と会員章を同会宛に贈呈した。(松田)

会務報告

七月、海外連絡委員会

▽日時　七月十六日(金)六時半
▽場所　本会ルーム
▽出席者　吉沢、近藤、丹部、芳野、松田
▽議事
(1)在ペルー山津大使より、同国を訪れる遠征隊の通関に関する要望書が届いた。本件適当にアレンジして会報にのせることにする(会報二四二号一五頁参照)
(2)オーストラリヤ Bush-Walkers 会員 John Crimmings 氏来日の件。
三田副会長を訪ねて来日した。目下関西旅行中にて神戸の津田氏はじめ兵庫県岳連の諸氏がお世話しているが、東京へ帰った後、本人より希望あれば世話することにする。
(3)シャモニー登山集会の件につき、近藤氏より説明あり、日本登山学校の林、飯田氏の遭難事情、今年の日本人アルプス・ブームに対する現地の反響等についても報告があった。
(4)その他各国登山情報を交換(松田)

常務理事会

(七月二十三日・ルーム)
▽出席者　加藤、深田、大塚、村木、松田、飯野
▽議事・報告事項
(1)六十周年記念事業賛助広告の件(加藤)
加藤理事作成の原案を検討し、担当者をきめる。
(2)六十周年記念晩餐会の件
加藤理事より去る七月二日開催の六十周年記念事業委員会の報告があり、その内容につき討議した。
(3)昭和四十年度実行予算案検討の件(飯野)
各担当理事より提出された予算を総合したところ、今年度は積極的に活動しているため、差引八六三千円の不足を生ずることになり、会務の運営上重大な支障を来たすことになることが判明した。そこで飯野理事より提出された資料を検討し、大幅に支出面を削減(五四七千円)逆に収入面は、会報広告五〇千円、寄付金一〇〇千円、六十周年賛助広告を三〇〇千円増やして五〇〇千円とし、他に図書基金より七〇千円、遭難対策基金より三〇千円を繰入れることにより計五五〇千円を増額することにする。なお次年度からは会費の値上げも考えねばなるまい。
(4)故君島久登氏葬儀予定の件

八月、理事・評議員会

(八月五日・ルーム)
▽出席者　松方会長、三田、渡辺副会長　理事――加藤、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、田村、住吉、杉浦、宮下　評議員――神谷、村井、藤井、望月、石原東京支部長、中田支部長　監事――野口、東京支部――沼倉、倉知、静岡支部――山本(以下委任)理事――村木、川崎、田辺、竹田、評議員――日高、青木、今西(寿)、吉沢、折井、津田、石原東海支部長、野口支部長、高山支部長、藤木顧問
▽議事、報告事項
(1)シャモニーに於ける事故顛末報告(倉知・沼倉)
国際アルピニスト集会に本会代表として参加していた君島久登氏は去る七月十八日、フレート・デ・シャルモにて不慮の遭難死をとげたが、遭難当時の

(次頁へ続く)

お断わり

関西支部、東海支部、東京支部の会務報告は次号に掲載します。悪しからずご諒承下さい。なお、図書紹介その他なども入りきれなくなりました。(吉沢)

JAC 海外登山に対する推薦状発行規定

1. JACは海外へでかける登山隊(Expedition)並びに学術調査隊(Scientific Research Expedition)に対し下記により推薦状(Recommendation)を発行することができる。
2. 第一条による推薦を受けようとするものは JAC 会長に対し下記書類を提出するものとする。
   (イ)推薦状交付申請書　2部
   (隊の正式名称<英文、邦文>、実施の時期、責任者氏名、留守本部、推薦状を必要とする理由明記のこと)
   (ロ)計画書　2部
   (隊員の氏名、年令、経歴、会員の有無、登山計画、経費予算、並びに入国の見通し、外貨枠取得に関する具体的方法、関連する後援団体の名称、その他参考となるべき事項を記載のこと)
3. 申請書にもとづき、会は理事会でその内容を審議し、つぎに述べる条件をみたすものに限り推薦状を発行する。
   ただし理事会において審議が困難な場合には理事会は会の海外登山委員会に審議を付託することができる。
   (イ)計画の主催団体が会に団体加入している場合、もしくは隊長が会員にしてかつ隊員の半数以上が当会の会員で構成されている場合。
   (ロ)推薦を受けようとする隊が海外における登山並びに学術調査を行なうに当り、一応の技術的水準に達しており、かつ、安全に目的を遂行しうる能力を持っていることが認められた場合。
4. 推薦状を発行した隊に対しても、会は経済的負担、ならびに事故に対しての責任は負わないものとする。
5. 本推薦状は、国際スポーツ行事用外貨枠とは関係ないものとする。
6. 推薦状の発行に当り、会は必要に応じて当該団体の責任者より推薦内容を確認するための念書を要求することが出来る。
7. 推薦状の英文は Recommendation とし、新聞紙上並びに公式文書等に公認(Authorized)、後援(Sponsored)等のまぎらわしい名称を使用してはならない。
8. 推薦状の交付を受けた隊はつぎに述べる順序に従い、会に対し、文書を以って報告しなければならない。
   (イ)準備段階にあっては経過報告等その都度行なう。
   (ロ)計画変更の場合
   (ハ)現地通信 JAC会報用に
   (ニ)帰国後
   i)帰国並びに遠征終了の報告。
   ii)JAC 機関紙「山岳」に対する公式報告。
   iii)報告書等の出版に際しては、JAC 図書室に寄贈する。

付則　1. 本規則は昭和40年3月4日より施行する。
2. 支部の計画で本部の承認を受けた計画並びに日本山岳協会海外登山審議委員会で国際スポーツ行事用外貨枠使用の許可を受けた隊はこの手続を省略して推薦状の交付をうけることができる。(以上)

状況、収容、帰国迄の経過を同行者倉知委員より報告あり（詳細六頁参照）、また二十六日遺骨帰国後、八月一日葬儀までの経過報告が松田理事および沼倉委員よりなされた。

(2)日本山岳協会の新しい組織について　（辰沼、松田）

八月八日の協会役員総会の議題である本件について説明があり、これにつき、中田支部長、山本委員等より支部としての行動は如何なる態度をとるべきかについて質問あり、本件につき種々討議した。

(3)六十周年記念事業の件（加藤）

十月十四日に記念晩餐会を行ないその際名誉会員を推薦し、会の功労者を表彰したい。催物としては講演会、展覧会、記念山行等を考えている。東京での行事が多いため、東京支部の人を中心とした実行委員会を作って運営していきたい。この実行委員会の人選については常務理事会に一任願いたい。

――本件承認。早急に常務理事会を開いて、具体案を作成し、実行委員を委嘱することにする。なお信濃支部より提案のあった神河内山荘改築案等については実行委員会に一任することを確認する。

(4)四十年度実行予算検討の件　（飯野）

七月二十三日の常務理事会で検討された昭和四十年度の実行予算案につき飯野理事より説明あり。総会で承認された予算三、七七五千円より、一、三五五千円多い五、一三〇千円の実行予算により運営していくことを確認する。

(5)各担当理事報告

①総　務　（松田）

常務理事会を七月二十三日、六十周年記念事業委員会を七月二日、東京支部との懇談会を七月六日、山岳診療所打合わせ会を七月十三日開催した。なお、七月十日には渡辺副会長が、信濃支部県境縦走壮行式に出席、辰沼、竹田理事は静岡支部本川根山岳会の講習会に出席した。

②山岳協会報告　（松田）

常務理事会を七月八日、十五日、二十二日、八月三日の四回開催し、協会の新らしい組織についての原案を作成した。なお六月三日には協会としての第一回の遭難対策委員会（顔合わせ）を行なった。

③海外連絡委員会　（松田）

七月十六日（金）定例の委員会を開催した（一三頁参照）。

会員係　（杉浦）

会員名簿は予算の関係で内容を一部修正し、A5版横版とし一〇五～一一〇頁を予定している。内容は定款、山岳会史、名誉会員、歴代会長、支部所在地、会員名簿（五十音順）にとどめることにした。

(6)その他報告事項

①「山岳」広告の件　（望月）

具体案を常務理事会で作ることにする。

②登山センター建設予定地視察報告の件　（加藤）

七月十～十一日の両日に亘り、文部省関係者に随行し、槙有恒、加藤泰安、小島六郎の三名が、千寿ケ原の予定地を視察した。

③弥彦山山開報告　（加藤）

七月二十日越後支部の要請にもとづき加藤理事が参加した。

④信濃支部、県境縦走隊壮行式出席報告。　（渡辺副会長）

⑤マレン氏より図書寄贈の件。シカゴ山岳会のマレン会長より、来日の際世話になったお礼にと、ヒマラヤ関係の図書四冊が寄贈された。

⑥東海村原子力研究所にいるアルバイン・クラブの会員 Richard Gowing 氏より松方会長宛、山の仲間を紹介して欲しい旨依頼があったので、本会会員で原研勤務の鈴木恭一郎氏（五、五三九番）を紹介することにする。

⑦スポーツ外貨の件　（大塚）

昭和四十年度のスポーツ外貨は会報に予告した様に八月二十五日で締切ることになった。

(7)その他提案事項（中田支部長）

①国立登山センターの諸問題につき地元が協力できる様に、本部から文部省に働きかけて欲しい。

②定例役員会が第一木曜日に行なわれているが、月初めは忙がしいので、第二か第三木曜に変更できないものか、御検討願いたい。（以上）

日本山岳協会
臨時役員総会報告

▽期　日　八月八日（日）一時より

▽会　場　体協会議室

▽出席者

専務理事―加藤、高橋（定）

常務理事―辰沼、大塚、松田、高橋（照）、藤代、鎌田

理事―小島、高山、水野、三井、山本、星野、羽賀、沢村

監事―藤井、植木　以上十八名

▽議長選出（議長小島六郎氏）

▽議事報告事項

(1)新組織について

議長より挨拶の後大塚理事より新組織についての説明があり、これに対し水野理事より〝学生山岳連盟の立場は考えなくてよろしいのか〟。三井、山本理事からも地方の立場より活発な質問があったが、本件は基本的には承認され、新たな組織作りに努力することになった。準備した声明書の原案も原案通り承認され四、〇〇〇部印刷し、早急に配付することにする。（二頁参照）

(2)新協会規約検討の件

規約案を検討、補足し、この役員総会にて承認することを確認した。但し施行月日を空欄にしておき、本規約が発効するのは次の役員総会できめることにする。それ故、本規約が承認されても、旧理事は、評議員会が開催される迄の間、業務を遂行する任務のあることを確認する。なおこの規約は声明書が配付された後、適当な時間をおいて配付する。配付の方法については常務理事会一任とする。

(3)今後のスケジュール

今後のタイム・スケジュールは声明書配付後の地方の反響をみてきめることにする。

(4)岐阜国体出席者の件

八名の予算しか組まれていないが、組織改組という重大な時期でもあるので、不足分は協会負担ということで十九名（国体委員は全員参加する）の出席を決める。（以上）

常務理事会

（八月十二日・ルーム）

▽出席者　加藤、松田、大塚、田辺、飯野各理事

東京支部―沼倉、関口、小味、倉知各委員

▽議　事

(1)六十周年記念事業に関する実行委員会組織の件

六十周年記念事業の実行運営のため左記の各氏に実行委員をお願いすることにする。

実行委員長―沼倉

実行委員―大塚、松田、飯野、宮下、川崎、田村、竹田、杉浦、田辺（以上本部理事）

関口、倉知、村井田、小味、松永、富田、鈴木（郁）（以上東京支部委員）

(2)六十周年記念事業案の内容検討の件

(イ)記念パーティー

期日　十月十四日（木）

形式　園遊会形式

会場　椿山荘

会費　二、〇〇〇円（夫人同伴を歓迎し、同伴者は会費半額とする。

招待者の人選は委員会に一任するが、マナスル協力者、体協、新聞社関係など広範囲を考える。なお記念祝賀パーティーの席での展示会は中止する。

(ロ)名誉会員の推挙

記念祝賀パーティーの席上で行ないたい。九月の定例役員会迄に常任理事会で選衡基準を作成し、定例理事、評議員会の席上で討議したい。

(ハ)功労者の表彰

記念祝賀パーティーの席上行ないたい選衡基準は原則として歴代正副会長、名誉会員、十年以上任期を勤めた支部長の範囲とし、松田理事が人選案を作成し、評議員会にて決めることにする。

(ニ)記念品の作成

具体案は委員会にて立案の上デザインを佐藤久一朗会員に依頼することにし、記念祝賀パーティーの式上功労者に贈呈することとする。一般会員にも同じ形のものを頒布することを考える。

(ホ)山岳六十年号を記念パーティーの席上頒布できる様努力したい。

(ヘ)記念催物を計画する

①展覧会

会場　西武百貨店SSSホール（交渉中）

時期　昭和41年5～6月

②映画と講演の会

会場　久保ホール

期日　十月十五日（金）

内容　実行委員会にて検討

③各支部記念山行

期日　十一月三日

内容　六十周年を記念して全国の支部にて記念山行または集会を実施

(3)六十周年事業賛助募金の件。

募金目標五十万円。募金趣意書を作成し、募金を開始する（担当　飯野理事）

(4)山岳六十年号広告の件

加藤、松田理事作成の原案を検討し、担当者に依頼することにする。（担当　飯野理事）（以上）

（故茨木猪之吉画伯）

訂正とお詫び

会報二四一号所収、六月定例理事、評議員会議事録の中、十四頁四段二十三行に「信濃支部主催長野県県境縦走計画は都合により中止になった」とありますが、この点につき高山支部長より、信濃支部としてはその様な事実を発表したことはないという御注意をうけましたので、こゝに謹んで訂正致します。尚県境一周縦走隊は去る七月十日乗鞍山頂で壮行式を行った後、壮途につき、目下縦走の途上にあり、来る九月十八日午後、乗鞍山頂に到着の予定です。

（松　田）

山岳保険に入りましょう!!

●貯蓄にもなります

●万一の場合にはひとの迷惑を軽減します

御相談は　日本団体生命　へ

新宿支社（専門取扱営業所）
東京都新宿区角筈1の844　新光ビル内
電話（352）1556・1557

△二三九号訂正▽

誤	正
高野君に関する誤謬二件	
3頁4段　旧蝋	旧胴。
上信越あちこち	
4頁1段　地名談議	談義。
故人の手紙	
11頁1段　紹介した	紹介したいが。
編集後記	
14頁5段　漫性	慢性。
追悼	
15頁4段　夜のの	夜の。

△二四二号訂正▽

1頁5段（梅沢観光は梅沢親光）
12頁5段（ビキーパーティーはビールパーティー）

編集後記

今号には川喜田さんその他の方々のカットを使わせて頂いた。有難うございました。上の広告は私の会社の広告だが無料ではない。会報の会計を楽にし、思いきった編集の出来るよう、皆さんも広告を集めて下さい。

原稿は相変らず沢山頂けて嬉しい悲鳴をあげているが、多々益々べんずるのであるから、これからも遠慮なく御送り願いたい。（但し鉛筆書きはご勘弁を）この間、蓼科山に登って来た。「かにかくに喘ぎ登りし蓼科の、頂き踏めばわれも楽しき」（吉沢一郎）

昭和四十年九月十五日発行

東京都渋谷区神宮前三ノ三一　外苑コーポ内
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　吉沢一郎　電話（402）六五〇一～五

頒価五十円　振替口座東京四二九番　東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所　株式会社　技報堂